

共同研究 ● 実践と感情—開発人類学の新展開 (2011-2013)

開発実践とリアリティ

社会開発や人間開発に関わる実践において、1990年代以降、調査者あるいは実務者が可能な限り支援の対象となる人々の目線に近づきながら「リアリティ」を捕捉することの重要性が指摘され続けている。開発プロジェクトの受益者たる人々の「ありのまま」の姿を理解すること、たとえそれが究極的には外部者には不可能であるとしても、可能な限りそれに近づくことが真に意味のある「開発」に不可欠であるという姿勢である。そのような姿勢の提唱者のひとりでもある R. チェンパースはリアリティについて、外部の専門家による科学的客観的事実というよりは、「個人の解釈によって形成される事実」と述べている。学問的な裏づけによる「リアリティ」を絶対視するのではなく、いわゆる専門家が科学的知識というものに基づいて一方的に自分たちの知識のみで「リアリティ」を解釈するのではなく、現地の人々の個人の経験から形成される価値観に由来するリアリティの重要性を強調する。そのようなリアリティを捉えた上で社会開発プロジェクトを進めることは、少なくとも理念的には今や常識化し、一部では参加型と称される実践ツールのもとで行われている。しかしそれでも、実際には表面的な理解にとどまっていたり、ただ単に参加型ツールを用いることでリアリティに近づいたと錯覚してしまうような、否定的なケースも多い。

本共同研究は、個人的リアリティを構成する個人の内面に生まれる感情を可能な限り取り上げて、人々の感情に注目した新しい開発支援の方法（開発人類学の姿）について考える機会である。開発研究一般に対してこれまで人類学が提唱してきた批判的な視点を刷新するだけでなく、人々の「感情」に配慮した新しい開発支援の方法を実務者等に提示することを最終的な目標としている。



研修センターで脱穀の作業をする研修生と指導員（中央）（2007年11月20日、ソロモン諸島マライタ島における NGO 研修センター）。

なお、本共同研究は2011年度に採択され、2年6ヶ月間継続される予定である。以下は、第1回会合（2011/12/10）における筆者の報告を踏まえた研究会の内容紹介である。

開発プロセスと「感情経験」

開発実践のプロセスを民族誌的に検討すると、プロジェクトの動向が、表面的なニーズの把握や人々のコンセンサス、人々の動向を追求するだけでは把握しきれない、関係する人々の感情（emotion）や感情傾向（sentiment）に大きく左右されることがわかる。ここでいう emotion とは人間の根源的な感情をさし、sentiment はそれよりも理性的な感情を伴い、何かに向き合う時の感情的な傾向を意味する。例えば、「開発プロジェクトの過程で腹を立てたり嫉妬したりするなどの当事者の心の有り様は emotion であり、「自分たちの開発とはこうあるべき」という開発に対する心の持ちようは sentiment である。

筆者はソロモン諸島で、ある日本の NGO による有機農業普及のための研修センター運営事業を調査している。そこでは約10ヶ月間に及ぶ寄宿制による長期研修が行われ、研修生たちは皆、「自分たちのこれからの生業は焼畑ではなく、有機技術を使った常畑である」という思い（sentiment）を抱いている。しかし、研修後に修了生たちに対する NGO からの支援がなかったために、習得した有機の技術や考え方が十分に活かされないまま



研修センターでの授業（2010年8月23日、ソロモン諸島マライタ島における NGO 研修センター）。

になっていた。修了生の中には、技術的なことを含め営農の問題を抱える者が多くいるが、周囲に相談する者も、営農をスタートさせるに足る自己資金も持ち合わせていない。修了生たちは NGO からの支援がないことについて、「怒り」の感情（emotion）を覚えている。中には「研修所（NGO）のことなんかもう忘れた」と言って、筆者から顔を背け、無視するような態度で露骨に不快感を示す者もいた。その状態に至るまでには、新しい技術を学ぶために親や親族が金を出してくれたのに、それを活かさないことによる焦りがあったり、事業のアイデアがあっても意欲が湧いても、資金や機材がないことに失望したりという心の葛藤があった。ここでいう「怒り」の感情とは、それらの動揺や興奮、葛藤（emotion）の束としての「怒り」である。

従来そのような様相に対して、「怒っている」と、表面化された行為のみをさして客観的に表現されてきた。しかし開発プロジェクトの時間的流れの中のある時点で状況を拾い上げ

てみると、事態を実際に動かす起点になっているのは、そのように客観的に表現される感情の「要素」たる動揺や興奮などの、「個人的主観の感情」である。客観化された感情語によってプロジェクト関係者の内面を外部化するのではなく、調査者によって「怒り」という言葉に回収される前に人々の中に湧き出ている感情が行為へとつながる様相（その連続性をここでは感情経験と呼びたい）に注目しプロジェクトの過程を読み解くことによって、リアリティをより人々の内面に近いところで捕捉することができるはずである。

人類学と「感情」

人類学において感情を正面から取り上げるきっかけとなった研究は、フィリピン・イロゴットで調査を行ったM. ロザルドの *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life* である。ロザルドは、異文化の出来事を象徴論的に捉えるのではなく、人間の持つ感情の揺れ動きの中で把握しようとした。それは日常的な相互関係の中に埋め込まれた行為として感情をみる見方である。それまで社会科学の研究課題として感情を取り上げることは、デュルケームが感情を、流動的で混合的であり、容易には定義づけることができず、ゆえに分析対象とはなり得ないと警告したり、行為目標の選択が感情に基づくことは（例えば「ジェラシーを感じている者が相手に嫌がらせをする」ということは）ウェーバーの行為論においては感情的行為として一括され、しかも重要な意志決定は知性・理性が支配し、感情は些細な行為のみに関わるという事実認識が先行したりしていたことから、一般に避けられてきたともいえる。しかし、ロザルドを1つの起点として、感情が社会的文脈において文化的に構築されるものとするアプローチが感情経験の社会的・認識的次元に対する注目を喚起することとなった。

人類学的にこのような日常的・社会的な相互行為にあらわれる感情を捉えるには、「感情語で客観的に感情を表現することをできる限り避ける（脱客観化）」という意味において、他者理解というリアリティの捕捉において間主観性が必要になってくるのかもしれない。間主観性の意味を、A. シュッツが述べるように、志向性を持ち、「変化する経験」を生きる人々が交流する対面的な関係の中で現実を再解釈し行為を形成していくこととすれば、対象の人々との協働（共同）による身体的な活動を行うことで、ここでいう「個人的主観の感情」に近づけるのかもしれない。シュッツは、個々の行為と構造と



養豚をおこなう修生。彼も有機による養豚のために NGO の支援を求めている（2007年11月21日、ソロモン諸島マライタ島クワイララデ村）。



熱心に養蜂の講義を受講する研修生たち（2010年8月27日、ソロモン諸島マライタ島の NGO 研修センター）。

の間に因果が含まれていると考えるのではなく、「ありのまま」に捉えることにこだわる。しかし人類学の場合、構造や規範の存在自体を疑うことはなく、ある意味その存在を自明視して対象に臨むことになる。個人的主観の感情という個々の人間に注目するので、構造や規範を排除しないまでも背景に退かせるということが手続きとして必要になってくるのかもしれない。さらに対面的な関係の中でのことであり、相互行為の中から思考や自己と他者関係のあり方が再構築される。その相互関係には、意見の表明や身振り、しぐさによるコミュニケーションなども含まれる。

開発のリアリティへ

開発プロジェクトに関わる様々な事象をつくりだす要因の一部として、個人的主観の感情を認識しそれに注目することは、開発研究において人類学が果たしうる領域の1つであると言える。本研究では、冒頭で述べた開発実践におけるリアリティの扱いに関する否定的実情を克服するためにも、開発の文

脈における感情経験の特徴を明らかにした上で、最終的にそれを開発プロジェクトの実践につなげる方策について考えてゆきたい。

【参考文献】

- チェンバース, R. 2000『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』野田直人・白鳥清志訳 明石書店。
- Leavitt, J. 1996. Meaning and Feeling in the Anthropology of Emotions. *American Anthropologist* 23(3): 514-539.
- Lutz, C. A. and L. Abu-Lughod (eds.) 1990. *Language and the Politics of Emotion*. New York: Cambridge University Press.
- Nolan, R. 2002. *Development Anthropology: Encounters in the Real World*. Boulder: Westview Press.
- Rosaldo, M. 1980. *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life*. New York: Cambridge University Press.
- シュッツ, A. 1980『現象学的社会学』森川真規雄・浜日出夫訳 紀伊國屋書店。
- 菅原和孝 2006『感情の猿=人』弘文堂。

せきね ひさお

筑波大学人文社会系教授。専門は文化人類学・オセアニア島嶼研究・開発研究。著書に『開発援助と人類学—冷戦・蜜月・パートナーシップ』（共著 明石書店 2011年）、『開発と向き合う人びと—ソロモン諸島における「開発」概念とリーダーシップ』（東洋出版 2001年）、論文に「対話するフィールド、協働するフィールド：開発援助における人類学の『実践』スタイル」（『文化人類学』72(3) 2007年）など。